

1. 背景とねらい

近年、りんどうの花腐菌核病が各地で多発している。本病については、発生生態が不明な点が多いため、防除適期を逃し、多発させている事例も多い。本病について2年にわたり検討してきたが、発生特徴、防除法について有効な知見が得られたので参考に供する。

2. 技術内容

(1) 病徴と診断

初め花卉にピンク色の水浸状不整形病斑が作られ、しだいに花全体に及び、花腐症状となる。更に花の基部から茎へ進展し、茎枯となる。花や茎の表皮下に菌核を形成することが大きな特徴である。菌核は、5~10mm程度の黒色、へん平、不整形である。

(2) 病原菌

りんどうだけに発生する。野菜や花き類に発生する菌核病とは異なる病害である。

(3) 伝染環及び発生の特徴

伝染源—病原菌は被害茎や被害花で作られる菌核（菌糸の塊）で越冬し、これが伝染源となる。菌核は、越夏して初めて菌核上にきのこ（子実体）を作ると考えられる。この子実体で形成される子のう胞子が降雨などによって花器に感染する。

子実体形成時期—安代町で8月中旬、北上市で8月下旬頃から始まる。その後子実体が成熟し子のう胞子を形成する。8月上旬までの形成は無いと考えられる。

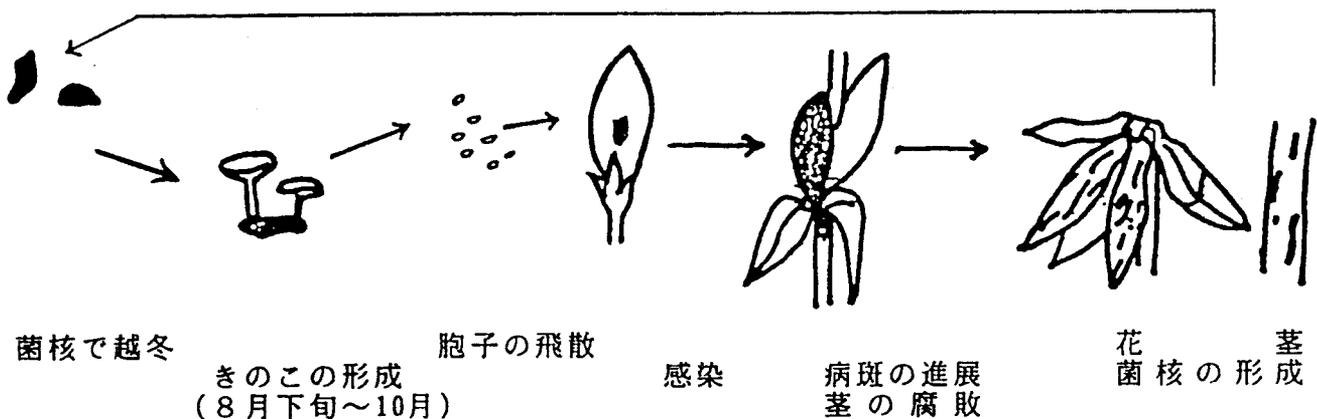
子のう胞子の飛散時期—安代町では8月下旬頃、北上市では9月上旬頃から始まり、10月末まで続く。年次変動があると考えられるが、現在のところ不明である。

感染時期—子のう胞子が飛散している時期でかつ、つぼみの形成始期以降に限られる。

花器からのみ感染する。花卉が着色し始める頃から感染可能で、花器の生育が進むほど感染しやすい。花卉の露出部分が5~10mm程度の時期は感染しない。

発病過程—感染から発病までの潜伏期間は4~5日と考えられる。したがって、収穫時に発病が認められなくても、出荷後に発病する場合も十分に考えられる。発病花は放置すると茎枯れに到り、花器内部や茎内に再び菌核が形成される。

その他の発生特徴—子実体の形成、成熟は、土壌水分が高く、日陰の部分が早い。



第一図 花腐菌核病の伝染環

